

フルトヴェングラー・センター®

The Wilhelm Furtwängler Centre of Japan

創設 2003 年 10 月 1 日 Established: 1 October 2003

名誉会長　Prof. Dr. アンドレアス・フルトヴェングラー

Honorary President: Prof. Dr. Andreas Furtwängler

会報第 76 号 2026 年 9 月 / Newsletter No. 76, September 2026

フルトヴェングラー・センター会員の皆様、

気候変動は止まることを知らず、昨年はスイス・アルプスの氷河の崩壊があり、今年の 8 月にはネパールで大規模な氷河と岩盤の崩壊による土石流が押し寄せ、多くの町や村を時速160kmで根こそぎ流し去る映像が繰り返し放映され、恐ろしい思いをいたしました。また日本の気象にも大きな影響を与えることとなり、何週間も雨が降らず、多くの水源地に水が不足する一方、一度降れば熊本県や千葉県のように線状降水帯の発生で、短期間のうちに何度も大きな浸水に見舞われるような大豪雨が降るといった極端な気候に悩まされることとなっています。まさに「異常が通常になる」時代を迎えている中で、被害を受けた方々には心からのお見舞いを申し上げます。

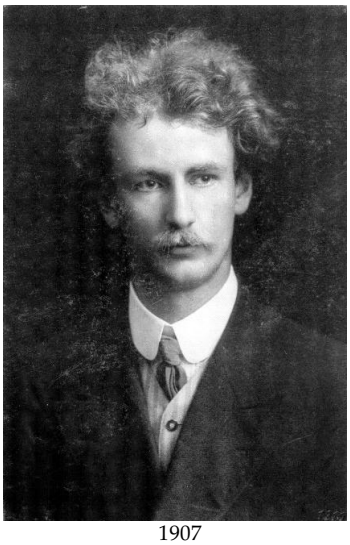
音楽の面では、ドイツではバイロイト祝祭 150 周年、日本でも多くの来日オーケストラや多彩な指揮者が来日し、東響の新しい音楽監督ロレンツォ・ヴィオッティの旬の音楽が聴ける一方、エストニアではネーメ・ヤルヴィがフルトヴェングラーの第 2 交響曲を演奏するなど、収穫の多い年になりつつあります。（怪我のため来日が中止になり日本フィルで予定されていた実演がキャンセルとなったのは誠に残念です。）

さて、会報第 76 号は次のような内容でお届けします：

目次

1. フルトヴェングラー研究資料：　フルトヴェングラー　デビュー演奏会
　　1906 年 2 月 19 日　P. 2 – 10
2. 新譜頒布のご案内　P. 10 – 13
3. 第 108/109 回レクチャー・コンサートのご報告（薬師寺純平・宮嶋大貴）と頒布資料について　P. 13 - 16
4. センター既発盤へのご感想　P. 16 - 18
　　Dietrich von Kaltenborn 氏
　　福原文夫氏　匿名希望氏
5. フランス・フルトヴェングラー協会の新譜（配信のみ）について　P. 19
6. 第 110 回レクチャー・コンサートのご案内　P. 19

フルトヴェングラーのデビュー演奏会　1906 年 2 月 19 日


1907

今年はフルトヴェングラーが最初に指揮者として登場した演奏会から120年となります。この演奏会が実現するに至った背景については、Herbert Haffner ヘルベルト・ハフナー著 ”Furtwängler”（2002 年出版） 邦訳書『巨匠 フルトヴェングラーの生涯』（2010 年 最上英明訳 アルファベータ発刊）で読むことができます。著者ハフナーは 2020 年に同書の改訂増補版「Wilhelm Furtwängler Im Brennpunkt von Macht und Musik」(ヴィルヘルム・フルトヴェングラー　権力と音楽の渦中に)を出版しましたが、これには初版出版以降に判明した事項や資料などが盛り込まれています。同書はまだ日本語訳の発刊には至っておりませんので、その第 3 章の冒頭部分を AI の助けを借りつつ、センターの中村が仮訳いたしましたので、以下でご紹介申し上げます。

第 3 章　「フルトヴェンドラーとかいう男」
——作曲家・指揮者としての最初の歩み

さてヴィルヘルムは、いわゆる「下積みの旅」に出ることとなる。母が懇願したのを受けて、


母　アーデルハイト
右：弟　ヴァルター

叔父ゲオルク・ドールンが仲介し、1905/06 年のシーズンをブレスラウ（訳註：現在のポーランド　ヴロツワフ）で過ごすことになったのである。このドイツ帝国第 5 の都市——当時すでに人口 40 万を超えていた——シレジアの州都は、豊かな文化的伝統を誇っていた。とりわけ、後にシレジア・フィルハーモニーへと発展する管弦楽協会の指揮台に立ち、名を成したのがブラームス崇拝者ベルンハルト・ショルツである。この楽団は、のちにドールンが 1934 年（訳註：本文では 1937 年とあるが、調査の結果訂正しました）まで率いることになるのだが、そのドールンもまたブラームスを愛しながら、それと同じくらい好んでレーガーやシュトラウスを取り上げた。シュヴァイドニッツァー通りのラングハンス劇場のオペラは、モーツァルトとヴァーグナーの上演で評価を高め、その 7 年前にはサンクトペテルブルクへの客演で華々しい成功を収めていた。シュトラウスやプフィッツナーもしばしば客演指揮者として指揮台に立っていた。

1905 年秋、ヴィルヘルムはブレスラウの地に赴く。管弦楽のリハーサルや芝居の付随音楽の指揮など、ささやかな実地経験こそ積ませてもらえたものの、彼はクリスマスにはもうシレジアの職を辞し、ミュンヘンへと舞い戻ってしまう。劇場楽長になるということが、彼にはどうしても耐えがたく思われたのだ——薄給という現実は措くとしても。それでいて彼は、意外にも自宅で「やはりまた公の場に立ちたい——しかも指揮者として」と宣言する。これには、あの父でさえ—— 息子の中にいつか偉大な作曲家となるのを今なお待ち続けていたあの父でさえ —— その理由をこう推測するほかなかった。

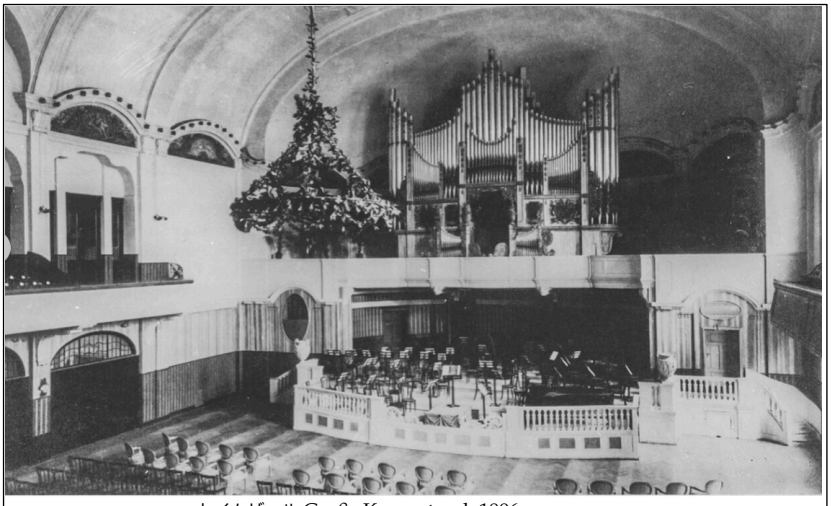
「実地経験を積んで楽長[カペルマイスター]になりたい、という突然の決意はどこから来たものか。あるいはベルテレ嬢が――彼女はどうやら結婚を急かしているようだが――関係しているのだろうか……〔中略〕彼自身はさして急いでいる様子もない。だが 2 人は切っても切れぬ間柄のように見える。」


父　アドルフ・フルトヴェングラー

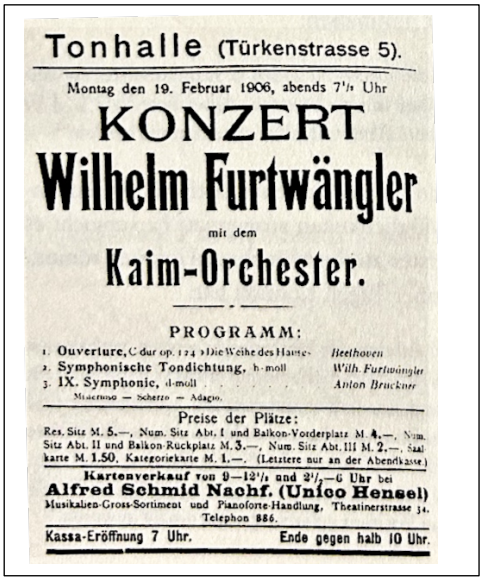
しかし、ミュンヘンのどこでこの「実地」の一歩を踏み出させればよいのか。宮廷顧問官アドルフ・フルトヴェングラーは、すでにあらゆる手を尽くしていた。ミュンヘン宮廷歌劇場の首席楽長に就任したフェリックス・モットル――母がカールスルーエ時代からの旧知の間柄である――にも当たってみたのだが、

「またしても失望の連続だ――我々が望みを託していたモットルは、慇懃ではあるが、ヴィリーに対してはっきりと拒絶的な態度をとる。彼の曲にまともに耳を傾けようともせず、自筆譜(合唱曲)にはざっと目を通しただけで、編成が実際的でないと言うのみ……〔中略〕ミュンヘンの仲良しグループは、彼を世に出そうとしないのだ。――かつての私たちの愚かさが、今になってますますはっきりと見えてくる――成功が絶対確実だった子供時代のうちに、彼を公衆の前に出しておかなかったという、あの過ちが。誰もがひれ伏すのは、結局のところ、公衆を前にしての成功、ただそれだけなのだから。〔中略〕あのとき世に出していれば、彼は確固たる地位を築き、唯一無二の存在になっていたであろうに。」

シレジアの批評家たちのみならず、ジムロック社やヨアヒムまでもがこの若き芸術家に背を向け、いまやモットルとその「一派」までもが敵に回ったとあっては、父アドルフ・フルトヴェングラーは――我が息子の抜群の才能が指揮という機会を得るに至ったことに欣喜しつつ――ミュンヘン随一の演奏団体、カイム管弦楽団に頼らざるを得なかった。この楽団は 1893 年、ピアノ製造業者にして宮廷顧問官フランツ・カイムが、王立歌劇場管弦楽団に対抗して創設したもので、2 年後にはトゥルケン通りとプリンツ・ルートヴィヒ通りの角に専用ホールまで建設させている。1905 年に正式に「トーンハレ」と改称されたものの、今も多くが「カイムザール」と呼んでいる。この楽団は後にミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団となるが、すでにフェリックス・ヴァインガルトナー、フェルディナント・レーヴェ、リヒャルト・シュトラウスらの指揮のもとに演奏し、グスタフ・マーラーも 1901 年と 1910 年、それぞれ交響曲第 4 番と第 8 番の初演でこの楽団を振っている。さらに 1898 年から 1901 年にかけては、ゲオルク・ドールンが指揮者を務めた過去もある。当時この


カイムザール Große Konzertsaal, 1896

オーケストラは財政危機に見舞われていた。そこで父フルトヴェングラーは、カイム管弦楽団の楽長ペーター・ラーベを介して、宮廷顧問官その人に直接接触する。アドルフ・フルトヴェングラーは 1400 マルクを支払い――これは当時としてはかなり大きな金額であった。ちなみにヴィルヘルムがやがて就くチューリヒの職での月給はわずか 100 マルクだった――　リハーサル 3 回と本番 1 回、そして成功すれば正指揮者として迎える旨も内示された。ヴィルヘルムは自信満々に、老練な指揮者にとってすら容易ならぬプログラムに挑む。冒頭にベートーヴェンの序曲「献堂式」、続いて実質的には彼の新作交響曲の第 1 楽章にあたる「交響的音詩」ロ短調、そしてブルックナーの交響曲第 9 番――。父はこの様子を書き留めている。


Tonhalle (Türkenstrasse 5).

Montag den 19. Februar 1906, abends 7½ Uhr

KONZERT

Wilhelm Furtwängler

mit dem

Kaim-Orchester.

PROGRAMM:

1. Ouverture, C dur op. 124 »Die Weihe des Hauses« — Beethoven
2. Symphonische Tondichtung, h-moll — Wilh. Furtwängler
3. IX. Symphonie, d-moll — Anton Bruckner

Moderato — Scherzo — Adagio.

Preise der Plätze:

Res. Sitz M. 5.—, Num. Sitz Abt. I und Balkon-Vorderplatz M. 4.—, Num. Sitz Abt. II und Balkon-Rückplatz M. 3.—, Num. Sitz Abt. III M. 2.—, Saalkarte M. 1.50. Kategoriekarte M. 1.—. (Letztere nur an der Abendkasse.)

Kartenverkauf von 9—12½ und 2½—6 Uhr bei

Alfred Schmid Nachf. (Unico Hensel)

Musikalien-Gross-Sortiment und Pianoforte-Handlung, Theatinerstrasse 34. Telephon 886.

Kassa-Eröffnung 7 Uhr. Ende gegen halb 10 Uhr.

〔コンサート・ポスター〕トーンハレ(トゥルケン通り 5 番地)。1906 年 2 月 19 日(月)午後 7 時半。演奏会　ヴィルヘルム・フルトヴェングラー　カイム管弦楽団共演。プログラム　1、序曲　ハ長調　作品 124『献堂式』ベートーヴェン　2、交響的音詩　ロ短調　ヴィルヘルム・フルトヴェングラー　3、交響曲第 9 番　ニ短調　アントン・ブルックナー(荘厳に――スケルツォ――アダージョ)
(キャプション:カイム管弦楽団との演奏会告知ポスター
〔ミュンヘン、1906 年 2 月 19 日〕 7 時半開演)

「W がいかに気迫を込めて全力を注いでいったことか、いかに自由に、いかに大きく、いかに瑞々しく力強く、いかに凄まじい勢いでその内より立ち現れ出たことか……〔中略〕あの物静かで内気な少年が、たちまちにして 1 人の男となった――すべてを巻き込むほどに、力強く。」

そして「ミュンヘナー・ノイエステ・ナッハリヒテン」紙は 5 日後、こう記している。
「月曜日、カイム管弦楽団による演奏会において作曲家・指揮者としてミュンヘンの聴衆に初めてお目見えしたヴィルヘルム・フルトヴェングラーは、まだ非常に若く、年長の芸術家であれば非難を招くであろう度を越した大胆さと自信も、彼に限っては大目に見てやりたい、いや、むしろ好ましいとさえ感じさせるものがある……〔中略〕強い音楽的才能が窺える以上、この若き芸術家がやがて優れた指揮者へと成長する可能性は、決して排除できないと思われる。」

だが当の「若き芸術家」自身の受け止め方は違っていた。彼は後年、このプログラムを「どうにか無難に」乗り切ったに過ぎないと語っている。おかげでカイムは、成功の暁には彼を指揮者として迎えるという約束を果たさずに済んだ――なんとも惜しい機会であったことか。ちなみに翌年、この楽団の指揮は、まもなく 1908 年にはシュトラスブルクへ去ることになるハンス・プフィッツナーに委ねられている。

遅くともこのあたりで明らかになるのは、フルトヴェングラーの成功を支えた重要な源泉が、彼の家族――すなわち帝政期の教養市民層に属する者が享受した経済的安定にほかならなかったという事実である。ずっと後年、実の娘の将来について語る際、フルトヴェングラーは次のような姿勢そのものに警鐘を鳴らしている。

> 「19 世紀末のいわゆる教養ある市民が、ある種の物質的保証のうちに生まれ落ち、世界を教養の課題として捉えるという、あの姿勢である。それ自体には美しい面が多々あるにせよ、今日の世界においてはもはや現実にそぐわず、いささか夢物語めいたものになっている。」

彼自身、これが自分自身についても語っていることを、はっきりと自覚していたに違いない。ヴィルヘルムはこの後も繰り返し、両親や親戚、友人たちに助力を求め、彼らの財力や人脈を頼らざるを得なかった。そしてその都度、新たな道が開かれていく。この最初の大演奏会を終えたいま、彼は自作にせよ他人の作品にせよ、これを統率するだけの資質が自分に備わっていることを感じ取り、さらなる実地経験の機会を求めて、再び奔走することになる。
（中略）
1906/07 年の新シーズンを迎え、ヴィルヘルムはマックス・フォン・シリングスの紹介により、チューリヒ歌劇場の第 3 楽長の職に就く――月給 200 フランで。そして早くも 1906 年 10 月 10 日には、彼はすでに同劇場の指揮台に立っている。2 つの一幕オペラの間には「舞踏絵巻」を指揮させられ、月末にはハンス・プフィッツナー作曲による、イプセンの戯曲『ソールハウグの祝宴』の付随音楽を指揮する。彼はこの地に住む叔父――父の兄弟にあたる――の一家と、しばしば楽しげに交わっていた。10 歳年下の従弟アルノルトは、ヴィルヘルムが時折「サロン」に閉じこもる様子に気づき、きょうだいたちとともに鍵穴から覗き見た。「従兄はそこに立ち、大きく開かれた本を置いたテーブルの前で、身振り豊かに指揮をしていた。目の前には数脚の空の椅子が並べられ、彼は時折それらに合図を送りながら、まるで会話でもしているかのようだった」――これぞ、後年の職業指揮者としての生活のゲネプロでもあったのだろう。彼はその後もずっと、ふとした折に口ずさみ、そして「指揮を」する癖を持ち続けた。

もちろん父もヴィルヘルムをこの地に訪ねている。父は、息子の大いなる才能からすれば、この境遇はまったく場違いであると感じていた。

> 「劇場からとても生き生きとした様子で出てくる彼の姿を見た。あのような外面的な仕事にも、ある程度まで没頭できるとは、私には思いもよらなかった。しかも彼は、良心的に、真剣に自分の任務に取り組んでいる。〔中略〕チューリヒの、より上等な人々と交わることもなく、そして自分自身を人前に示すということが――〔なんと!〕――彼にはどうしてもできないのだ。それゆえ彼には、卑しい環境の中で、自分にふさわしからぬ仕事をしなければならないという重荷がのしかかっている。しかもそのあいだ、彼は 1 日じゅう極度に張り詰めた状態にあり、自分自身のための時間はまったく残らない。」

つまり、作曲のための時間ということである。
（中略）
1907 年 2 月初め、ヴィルヘルムはチューリヒでレハールの『メリー・ウィドウ』のスイス初演をはじめ、都合 8 回の上演を指揮する。当時、まさに 1 年余りにわたり世界を席巻していたこの舞台の一大ヒット作であったが――しかしレハールは仰天して、自宅にこう書き送っている。

> 「あの楽長は――フルトヴェンドラーとかいう男は――アマチュア楽団『ヴィルデ・グングル』を『エロイカ』を演奏するオケに仕立て上げようとし、まるで御者が夜通し馬を鞭打つように、猛烈に振り回しおった。かくも見当違いな評価を、2 度と受けたくないものだ! このならず者のせいで、私の『ウィドウ』はすっかり評判を落とし、じきにスイスでは誰も見向きもしなくなるだろう。あれほど実入りの良い土地であるというのに! 言っておくが……**フルトヴェンドラー**という名は覚えておいたほうがよい――2 度とあのような交響曲まがいの大騒動に引っかからぬように。」



„Als ob es die Götterdämmerung gewesen sei": *Die lustige Witwe* im Stadt-Theater Zürich (1907)

Wilhelm Furtwängler in Zürich (1906)

〔劇場ポスター〕市立劇場。1907 年 2 月 8 日(金)。『メリー・ウィドウ』。ヴィクトル・レオンとレオ・シュタインによる 3 幕のオペレッタ。音楽:フランツ・レハール。音楽監督:ヴィルヘルム・フルトヴェングラー。(キャプション:「あたかも『神々の黄昏』であったかのように」――1907 年、チューリヒ市立劇場における『メリー・ウィドウ』上演／1906 年、チューリヒでのヴィルヘルム・フルトヴェングラー)

レハールは、フルトヴェングラーの分析がいかに正鵠を射ていたか、おそらく気づいていなかった。フルトヴェングラー自身も後年たびたび語っているところによれば、彼は『メリー・ウィドウ』を、まるで『神々の黄昏』であるかのように指揮したのだという――もっともそのせいで、この喜歌劇の希薄な中身はそうした重みに到底耐えきれず、演奏中はひどく退屈させられた、とも。

チューリヒではおよそ大作に触れることも許されず、オペレッタですら成功を収められないという事実は、彼をして、その鬱屈を露骨に外へ表すことへと駆り立てた。ピアノ稽古の最中に木の実をかじり、殻を後で楽器の中から取り出さねばならなかったこともあれば、ある上演では第 2 幕、メリー・ウィドウ、ハンナ・グラヴァリとその相手役ダニロとの長い台詞のやりとりの後、入りを「ぼんやりと」忘れ、3 度目のきっかけが来てもなお反応しなかったこともあった。――結局フルトヴェングラーは自ら申し出て降板を願い出、こうして 16 回目の上演をもって、1907 年 4 月 21 日、規定の解約告知をもってチューリヒ楽長としての職を終える。

〔付録〕当時の演奏会評　新聞記事のファクシミリ版全文 (出典：digiPress)
「アルゲマイネ・ツァイトゥング」紙(ミュンヘン、1906 年 2 月 21 日付)

「昨日トーンハレにて、ミュンヘンの若き作曲家、かの著名な考古学者の令息ヴィルヘルム・フルトヴェングラー氏が、ベートーヴェンの序曲作品 124、自作の交響的楽章、そしてブルックナーの交響曲第 9 番を指揮した。その演奏ぶりは、生き生きとした感受性と、細部にまで鋭く切り込む音楽的洞察力とを物語っており、これらの資質は、とりわけ現代の交響音楽が要求するような、大きな様式による構成力を彼に大いに授けているように思われる。
序曲においては――その微視的とも言うべき多様性が、音楽的弁証法のもっとも厳格な形式に依拠しているのだが――そうした細部がいかに明瞭に浮かび上がっても、全体の運びが疎かにされることはなかった。指揮者は簡潔な統括によって、巧みに構築全体の方向づけへと導くすべを心得ていた。
ブルックナーの交響曲の再現も、まことに堅実な出来映えであった。この作品では何よりも、広がりのある大きな造形が問われるが、スケルツォなどは驚くほどの確かさをもって、リズムの対比の中で実に新鮮に響かせていた。そしてこの一風変わった、振動するような雰囲気――この曲特有の――は、すでに冒頭の数小節から立ち現れていた。もっとも終楽章のアダージョでは、この心地よい確かさがいくぶん弱まっていた。ただ一つ、この若き芸術家に申し添えて



Theater und Musik.

z. **Orchesterkonzert.** Ein junger Münchener Komponist, Wilhelm Furtwängler, Sohn des berühmten Archäologen, dirigierte gestern in der Tonhalle Beethovens Ouvertüre op. 124, einen symphonischen Satz eigener Arbeit und Bruckners Neunte Symphonie. Seine Vortragsweise zeugt von lebhafter Empfindung und scharf ins einzelne dringender musikalischer Anschauung; das sind Anlagen, die ihn zu Gestaltungen großen Stils, wie sie vor allem die moderne Symphonik erheischt, in hohem Grade befähigen. In der Ouvertüre, deren mikrokosmische Mannigfaltigkeit zu den strengsten Formen musikalischer Dialektik greift, war über diesen Details, so klar sie zum Vorschein kamen, die Linienführung nicht vernachlässigt; mit bündiger Zusammenfassung wußte der Dirigent geschickt auf die Totalität des Aufbaues hinzuarbeiten. Eine sehr tüchtige Leistung war auch seine Wiedergabe der Brucknerschen Symphonie, in der alles zunächst auf weitausgreifende, breite Gestaltung ankommt; ungemein frisch brachte er da das Scherzo, in den rhythmischen Kontrasten mit erstaunlicher Sicherheit; und die eigentümliche, vibrierende Stimmung, die von diesem kuriosen Tonstück ausgeht, stellte sich schon mit den ersten Takten ein; im Schluß-Adagio ließ allerdings diese wohltuende Bestimmtheit etwas nach. Aber Eines möchten wir dem jungen Künstler ans Herz legen, mehr Ruhe in der Kopf- und Körperhaltung; das beständige Nicken und Wippen sieht nicht gut aus und kann sogar die Zeichengebung sehr störend beeinflussen; und dann das Dirigieren mit ganzem Arm; nichts ist anstrengender und überflüssiger. Gewiß sollen die Haupteinsätze und die dynamischen Uebergänge entsprechend markiert werden; aber in den meisten Fällen wird ein Blick, ein kurzer Ruck mit dem Körper, eine schlichte Geste vollauf genügen; wie die Beispiele unserer großen Dirigenten lehren, ist man von der Bülowschen Vivacité heute zur sparsamsten Zeichengebung zurückgekehrt. Ueber die kompositorische Befähigung des jungen Dirigenten läßt sich nach dem einen symphonischen Satz noch kein abschließendes Urteil geben; daß Furtwängler das Zeug zu bedeutenderen Aufgaben in sich hat, läßt sich aus manchen Zügen seines Tongedichtes erkennen; die Erfindung ist eigentümlich, die Anlage nicht uninteressant; auch in der Orchesterbehandlung, einige kleine Ungeschicklichkeiten in den Posaunen und Trompeten abgesehen, zeigt sich ein ernster Sinn. Aber dem Ganzen fehlt, wie so vielen anderen symphonischen Werken, die organische Durchbildung, die Entwicklung aus spontanen Motiven und nach ausschließlich musikalischen Gesichtspunkten. Es ist zu ausgedehnt, zerbröckelt in Details und kommt um die redlich beabsichtigte Totalwirkung. Möge es daher dem hochbegabten jungen Musiker gelingen, ein seiner Individualität entsprechendes Gestaltungsprinzip zu finden. Dann können wir von ihm Bedeutenderes hoffen!

おきたいのは、頭部と体の構えにもう少し落ち着きを、ということである。絶えず頷いたり体を揺すったりするのは見た目にも良くなく、それどころか合図そのものを大いに乱す恐れすらある。これほど無駄で消耗を強いるものはない。むろん主要な入りや強弱の推移には、それに応じた明示が必要ではあろうが、大抵の場合、眼差し、体のわずかな動き、素っ気ない身振り一つで十分に事足りるはずである。かの偉大な指揮者たちの範に見るとおり、今日ではビューロー流の(生き生きとした)身振りから、もっとも簡素な合図法へと立ち返ってきているのだから。

この若き指揮者の作曲家としての力量については、交響的楽章一曲を聴いただけでは、まだ最終的な判断を下すことはできない。とはいえフルトヴェングラー氏が、より重要な仕事をなし得るだけの資質を内に秘めていることは、彼の音詩のあちこちの筆致から窺い知れる。着想は独特であり、構想もまた無関心ではいられないものがある。管弦楽法についても、トロンボーンとトランペットにいくつかの小さな不手際が見られるとはいえ、真摯な意識が感じられる。しかし全体としては、これほど多くの他の交響作品と同様に、有機的な仕上げ――自発的な動機から発し、もっぱら音楽的な観点に沿って展開していく仕上げ――が欠けている。曲は延び過ぎており、細部において散漫になり、誠実に意図された全体的効果を逸してしまっている。それゆえ、この才能豊かな若き音楽家が、自らの個性にふさわしい造形の原理を見出すことができるよう願わずにはいられない。そのときこそ、我々は彼にさらに重要な仕事を期待できるであろう!」



Wilhelm Furtwängler, der am Montag in einem mit dem Kaimorchester veranstalteten Konzert als Komponist und Dirigent vor dem Münchner Publikum debütierte, ist noch so jung, daß man ein Uebermaß des Wagemutes und Selbstvertrauens ihm sehr gern zu gute halten, ja wohl sympathisch finden darf, was bei einem älteren Künstler Tadel verdiente. Daß er sich nun gerade Bruckners neunte Symphonie für seinen ersten Dirigierversuch in größerem Maßstabe aussuchte, zeugt zwar von gutem Geschmack und hochstrebendem Wollen, widerspricht denn aber doch allzusehr der alten Regel: Experimentum fiat in corpore vili, um volle Billigung finden zu können. Was selbst bei einem fertigen und erfahrenen Dirigenten ein Wagnis bedeutet hätte — mit drei oder vier, dazu noch durch andere Aufgaben belasteten Proben ein solches Werk vollbefriedigend herauszubringen — das mußte natürlicherweise dem Anfänger fehlschlagen. Unter solchen Umständen verdiente es sogar anerkennend hervorgehoben zu werden, daß manches, z. B. das Scherzo — abgesehen von dem zu rasch genommenen Trio — doch schließlich noch erstaunlich gut herauskam. Immerhin läßt sich die Frage, ob Herr Furtwängler ausgesprochenes, angeborenes Dirigententalent hat, nach dieser Probe weder bejahen noch verneinen. Auch die Wiedergabe der den Abend einleitenden Beethovenschen Ouvertüre „Zur Weihe des Hauses" gab darüber keine rechte Klarheit. Da eine starke allgemein musikalische Begabung ohne Zweifel vorhanden ist, erscheint es nicht ausgeschlossen, daß der junge Künstler mit der Zeit noch einmal einen tüchtigen Dirigenten abgeben werde. Um dazu zu gelangen, müßte er aber erst einmal lernen, worauf es beim Dirigieren eigentlich ankommt, z. B. das ganz Elementare, daß die Bewegungen des Dirigenten, auch wo sie über das bloße Taktieren hinausgehen, zweckmäßig zu sein haben, d. h. geeignet, die Intentionen des Orchesterleiters auf die Ausführenden in möglichst deutlicher und möglichst zwingender Weise zu übertragen.

Einen weit stärkeren Eindruck als der Dirigent hat der Komponist Furtwängler auf mich gemacht. Seine symphonische Dichtung in h-moll — eine Bezeichnung, die man hier wohl nur im Sinne eines relativ selbständigen und in sich abgeschlossenen Symphoniesatzes zu verstehen hat — ist zwar noch sehr wild, sehr chaotisch und sehr unreif. Aber sie läßt doch ein kräftiges und tiefes Empfinden, ein echtes und ernstes Wollen, und, worauf es vor allem ankommt, zum mindesten in embryonaler Anlage eine wahrhaft eigenschöpferische Potenz erkennen. Wenn der starke Beifall, an dem es dem jungen Künstler den ganzen Abend über nicht fehlte, nicht dahin von ihm mißdeutet wird, daß er nun tatsächlich schon etwas Großes erreicht zu haben vermeinte, so könnten gerade die Erfahrungen, die er an diesem Abend zu machen die reichste Gelegenheit hatte, sehr viel dazu beitragen, daß er das Ziel, dem er zustrebt, rascher und ohne allzugroße Umwege erreiche.

「ミュンヘナー・ノイエステ・ナッハリヒテン」紙 (出典：digiPress) (1906 年 2 月 24 日付)

***Münchner Neuesten Nachrichten,* 24. Februar 1906**

「ヴィルヘルム・フルトヴェングラーは、月曜日、カイム管弦楽団と共催された演奏会において、作曲家兼指揮者としてミュンヘンの聴衆の前に初めて登場したが、彼はまだ非常に若く、年長の芸術家であれば非難に値するような過度の大胆さと自信も、むしろ大いに好意的に、いや共感的に受け止めてよいだろう。

彼が本格的な指揮の初挑戦として、まさにブルックナーの第 9 交響曲を選んだことは、たしかに良い趣味と高い志を示すものではあるが、「実験は取るに足らぬ材料(あるいは価値の低いもの)に対して行うべし」という古い格言("Experimentum fiat in corpore vili")にはあまりに反しており、全面的な賛同を得るのは難しい。熟達し経験を積んだ指揮者にとってさえ危険な賭けとなったであろう――しかも他の仕事に追われながらの 3、4 回の練習でこの作品を十分に満足のいく形で仕上げるということは――当然ながら初心者には失敗する運命にあった。

こうした事情を踏まえれば、たとえば速すぎたトリオの部分を除けば、スケルツォなどが最終的には驚くほど良く仕上がっていたことは、むしろ評価に値すると言えるだろう。

とはいえ、このお披露目だけでは、フルトヴェングラー氏に生まれながらの指揮の才能があるかどうかを、肯定も否定もできない。夕べの冒頭を飾ったベートーヴェンの序曲『献堂式』の演奏も、この点について明確な答えを与えるものではなかった。彼に強い音楽

的才能全般が疑いなく備わっている以上、この若き芸術家が、いつか有能な指揮者へと成長する可能性は排除できない。しかしそこに至るには、まず指揮において本当に重要なことを学ばねばならない。たとえば最も基本的なことだが、指揮者の動作は、単なる拍取り以上のものであっても、常に目的にかなったものでなければならない――つまり、指揮者の意図を、できるだけ明瞭に、できるだけ説得力を持って演奏者に伝えるのに適したものでなければならないということである。
指揮者としてよりも遥かに強い印象を私に与えたのは、作曲家としてのフルトヴェングラーである。彼の口短調交響詩――ここでの「交響詩」という呼び方は、比較的独立した、完結した一つの交響楽章という意味で理解すべきだろうが――は、たしかにまだ非常に荒々しく、非常に混沌としており、非常に未熟である。しかしそれでも、力強く深い感性、真摯で真剣な意志、そして何より重要な、たとえ胚芽の段階であっても、真に創造的な力の萌芽を認めることができる。
この若い芸術家が夕べを通して受け続けた大きな喝采を、自分が既に何か大きなものを成し遂げたのだと誤解しないならば――むしろ、この夜に彼が得た豊かな経験こそが、彼が目指す目標へと、より速く、あまり大きな回り道をせずに到達する大きな助けとなるだろう。」
（後略）

ゲオルク・ドールンについて(ドイツ語版 Wikipedia より)


ゲオルク・ドールン

ゲオルク・ドールン(1867 年 5 月 23 日、マクデブルク近郊バーレンドルフ生まれ ― 1942 年 3 月 9 日、ミュンヘンで死去)は、ドイツの指揮者・ピアニストである。

生涯
ドールンは 1867 年、荘園管理人(「アドミニストラトール」)の息子として生まれた。叔父は動物学者アントン・ドールンである。1904 年、富裕な商家の娘であったピアニスト、ヘートヴィヒ・コミヒャウ(1871–1968)と結婚し、2 人の子――銀行家クラウス・ドールン(1905 年ブレスラウ生まれ、1993 年フェルトキルヒェン=ヴェスターハムで死去)、およびバルバラ・ドールン(結婚後ベーレント姓、1908 年生まれ、1998 年死去)――をもうけた。

ゲオルク・ドールンはマクデブルク大聖堂附属ギムナジウムとライプツィヒ・トーマス学校に通った。祖父カール・アウグスト・ドールンと同様、まずライプツィヒ大学、ミュンヘンのルートヴィヒ・マクシミリアン大学、ベルリンのフリードリヒ・ヴィルヘルム大学で法学を学んだ。1891 年、ハイデルベルクのルプレヒト・カール大学で法学博士号を取得している。この時期、ブレスラウの実家にはたびたび作曲家ヨハネス・ブラームスが訪れ、彼を音楽の道へと促した。ドールンはケルン音楽院に入学し、第 1 西部戦砲兵連隊で兵役を務めた。1895 年、ヴァイマル宮廷劇場とミュンヘンの王立宮廷劇場でソロ伴奏(コレペティ)を務めた。1897 年、フレンスブルクの市立劇場の指揮者となった。1898 年から 1901 年まで、ミュンヘンのカイム管弦楽団の指揮者を務めた。

1901 年、ブレスラウ管弦楽協会と合唱アカデミー(ジング・アカデミー)の首席指揮者となった。1910 年には教授の称号を授けられた。ブレスラウ時代、ドールンはフェルッチョ・ブゾーニ、ヴィルヘルム・ケンプ、ジークフリート・シュルツェ、アルトゥール・シュナーベル、ヴィルヘルム・バックハウス、ルドルフ・ゼルキン、エドゥアルト・エルトマン、アドルフ・ブッシュ、ヴラディーミル・ホロヴィッツ、フリッツ・クライスラー、ブロニスワフ・フーベルマン、オイゲン・ダルベール、イロナ・ドゥリゴ、マリア・イーヴォギュンといった音楽家たちと共演した。客演演奏会では、ワルシャワ、フランクフルト・アム・マイン、トリノ、ライプツィヒにも赴いている。

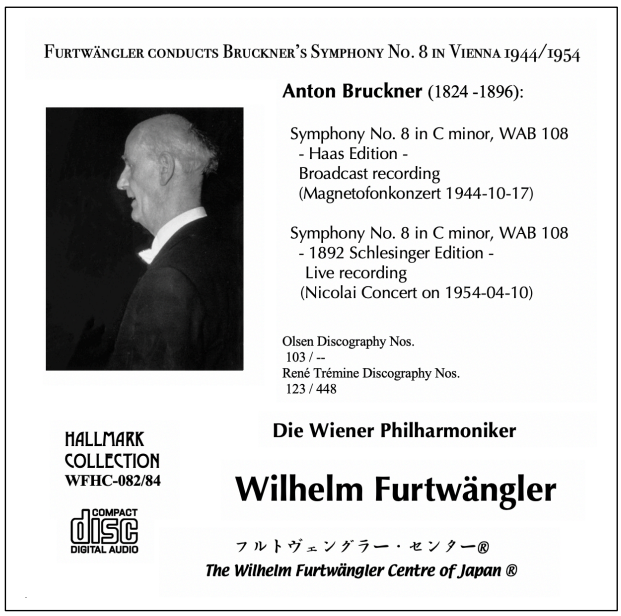
ゲオルク・ドールンはまた、ヨハネス・ブラームス、グスタフ・マーラー、マックス・レーガー、アントン・ブルックナー、ハンス・プフィッツナーらと親密な音楽的交友を結び、書簡を交わした。
彼の従甥(いとこの息子)にあたるのがヴィルヘルム・フルトヴェングラーであり、若き日のフルトヴェングラーを音楽的に支援した人物である。
1936 年、パーキンソン病のためドールンは公の場から退き、晩年をシュタルンベルク湖畔のゼースハウプトで過ごした。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

新譜頒布のご案内

●ブルックナー作曲　交響曲第８番　ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

1944 年 10 月 17 日　ウィーン　ムジークフェラインザールでの放送用録音
1954 年 4 月 10 日 ウィーン　ムジークフェラインザールでの演奏会ライブ録音



会報第 75 号頒布資料ではフルトヴェングラーが 1949 年にベルリン・フィルを指揮した 1 日違いの演奏によるブルックナーの交響曲第８番２種の演奏を 2 枚組 CD 及びハイレゾ・ファイルでお聞きいただきましたが、今回はウィーン・フィルを指揮して録音した 1944 年のマグネトフォン・コンサートと 1954 年ウィーン・フィル　ニコライ・コンサート演奏会ライヴ録音による同曲をまとめました。1954 年の演奏は、結果的にフルトヴェングラーによる最後のブルックナーの交響曲演奏となったものです。

音源は 1944 年録音が英 Unicorn の初出盤 LP UNI109~110、1954 年版はオーストリア放送（ORF）のオリジナル録音です。後者については WFHC-027 として SACD ハイブリッドで既頒布ですが、現在は完売・廃盤となっていて、完売後に入会された会員の皆様からの再頒布のご要望が大きかった録音です。この録音は演奏開始前や楽章間の会場音などが全て収録されており、収録時間が 82 分を超えて通常の CD の収録限界を超える為、WFHC-027 ハイブリッド SACD 頒布時の CD 層は楽章間会場音を短く切り詰めて 1 枚に収容せざるを得なかった経緯がありました。今回は録音された音全てを収録するべく CD 2 枚に収納し、1944 年版と合わせて 3 枚組としましたのでご了承ください。

解説はセンター版 CD の解説やレクチャー・コンサートでお馴染みの舩木篤也氏にお願いしました。いつもエキサイティングかつ真の意味で啓蒙的な解説を書いていただいていますが、この CD の解説も第 1 級の読み物となると期待されます。
センター版 CD では「伝統」となった演奏会プログラムも、1954 年 4 月ニコライ・コンサートのプログラム全 28 ページのファクシミリ版を同梱いたします。

WFHC-082/84
フルトヴェングラー指揮 ブルックナーの交響曲第 8 番
1．　1944 年 10 月 17 日　ウィーン楽友協会大ホールでの
**　　マグネトフォン・コンサート**
2．　1954 年 4 月 10 日　ウィーン楽友協会大ホールでの
**　　ニコライ・コンサート・ライブ**

頒布資料代：**CD-R 3 枚組　WFHC-082/84　　頒布価格　6,000 円**（送料込み）

ご購入いただいた方限定で、192Hz/24bit ハイレゾ・デジタル音源を配信します：
192kHz/24bit デジタル音源（wav） 追加価格　2,000 円

1. CDR 製作用原盤の製作にあたっては、「桧山コレクション」で使用してきている Plextor 社製作の CDR 焼成機の銘機「PlexMaster」により、パソコンなどの CDR 焼き込みでは到達できない純度の高い CDR 原盤を作成しています。
2. 頒布用 CDR 製作については、「桧山コレクション」でも使用したプロ仕様のハイスペック CDR を使用し、更に原盤を忠実にコピーする「1：1　オンザフライ」プロセスにより、原盤の音を完全に再現することといたしました。

＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃

桧山コレクション　改訂新版及びハイレゾ音源頒布について

センター元相談役・故山口勗氏（ペンネーム 桧山浩介）愛蔵のフルトヴェングラーの 78 回転盤レコード（以下 SP）の中から SP をセンター会員諸兄のフルトヴェングラー研究に供するための資料として CD 化・ご提供することとし、2014 年から 2021 年 6 月の第 23 集までシリーズ化しましたが、その後センターで入手できたより良い音の SP をハイレゾで再収録する一方、これらもハイレゾ・ファイルのままで聴きたい、とする会員の方々のご希望に応える観点から、「**桧山コレクション　ハイレゾ音源シリーズ**」と題して、一部音源を差し替えつつ、CD 及びハイレゾ・ファイルとして頒布することとしています。ハイレゾ・ファイルの頒布はこれまで通り gigafile 便を使用する予定です。配信用のカバー・スリーブなどは印刷物としてはありませんが、代わりに CD 制作時に使用した印刷用原稿を一部手直しの上 PDF 化して添付いたします。頒布は順不同となります。

●桧山コレクション　第１+13 集改訂版

① ブラームス作曲　交響曲第１番　1947-11-17 / 19 / 20 / 25
　ウィーン・フィル （ウィーン　楽友協会大ホール）
　(フランス HMV(VSM) 制作 SP DB6634~6639, 英 HMV DB9222 混成新復刻）
② ブラームス作曲　ハイドンの主題による変奏曲　1949-3-30, 1949-04-02
　ウィーン・フィル （ウィーン　楽友協会大ホール）
（英 HMV D.B.6932~4 による新復刻）

③ ブラームス作曲　ハンガリア舞曲集
　第１番ト短調（オーケストラ版第１番ト短調）
　第 10 番ヘ長調　（オーケストラ版第３番ヘ長調）
英 DECCA DE7006 による新復刻　ベルリン・フィル　ベルリン音楽大学　1930 年録音）
　第１番ト短調（オーケストラ版第１番ト短調）
英 HMV D.B.9727 による新復刻　ウィーン・フィル　ウィーン楽友協会第ホール
　第３番ヘ長調　（オーケストラ版第２番二長調）
　第１０番ヘ長調　（オーケストラ版第３番ヘ長調）
英 HMV D.B.6934 による新復刻　ウィーン・フィル　ウィーン楽友協会第ホール



この改訂版は桧山コレクション第 1 集と第 13 集を集成した新版で、レコード面は超音波洗浄などを施した上で再収録、面ごとの収録と繋ぎ版の両方を CD とハイレゾ・ファイルの両方でお楽しみいただきます。

指揮　：　ヴィルヘルム・フルトヴェングラー

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団（③の一部）

WFFC1401R-HYM-A/B CD2 枚組　　頒布価格：3,000 円
WFFC1401R-HYM_HiRes (ハイレゾ・ファイル)　頒布価格：3,000 円
（CD 版と同時にお申し込みいただいた場合　　頒布価格：2,000 円）

資料申込要領：

1. 同封の郵便振込票をご利用ください。
2. 申し込み期限は **2026 年 10 月 30 日（金）**です。これ以降もお申し込みはお受けしますが、原則として受注生産・配信対応を行いますので、できるだけ期限までにお申し込みをお願い致します。
3. 頒布資料はセンター会員自身が所有される事を条件に配布しておりますので、オークションを含む転売及び譲渡目的・名義貸しは一切お断り致します。

頒布予定：　2026 年 11 月 下旬

お問い合わせの際は　①振込年月日、　②振込金額をお知らせ下さい

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

第 108 回レクチャー・コンサート　（講師：　広瀬大介　博士）
（2026 年 5 月 10 日(日)開催）
報告：フルトヴェングラー・センター　理事　薬師寺純平

広瀬大介博士によるベートーヴェンの交響曲全曲解説も佳境に入り、交響曲第 3 番の後半に入りました。
これまでの博士の解説を聴いてからというものの、ベートーヴェンの作品を聴きながら、ベートーヴェン自身が一体何を考えながら作曲していったのかが気になるようになりました。普段何気なく聴き慣れてしまったパッセージが、実は当時としては斬新なアイデアであったことを聞き逃していたことに気が付くのです。

今回のレクチャーでは、終楽章の特異性について詳しく解説頂きました。交響曲で変奏曲が使われることはベートーヴェンが初めてではないものの、終楽章でこれだけの規模で描かれたものはかつてありません。しかも、変奏曲とは言いながら、どうやら主題がいくつかある。それらの主題をまったく独立したものと考えるのか、第 1 主題からの派生と考えるのかによって、音楽の構成に関する理解は異なってくる。転調もそれまでの常識とは異なる。プロメテウスの創造物からエロイカの主題による変奏曲を経て到達したベートーヴェンの結論。ベートーヴェンは作曲しながら何を考えたのか。どうやって聴き手の度肝を抜こうとしたのか。答えのない結論を探すような話ではあるものの、我々の想像をかき立ててくれる。そういう魅力がベートーヴェンの作品にはあるということを改めて感じさせてくれるお話でした。

なお、例によって頒布するブルーレイ・ビデオディスクには、1944 年の「ウラニアのエロイカ」のほか、1947 年録音の SP 盤、1952 年 12 月 7 日のライブ録音を高音質で収録してあります。「ウラニアのエロイカ」では最新のウィーン・フィルの録音を参考にピッチ修正を試みたものです。（フルトヴェングラー時代のピッチは現在と同じ）

第 109 回レクチャー・コンサート　（講師：　坂入健司郎氏）

（2026 年 8 月 23 日(日)開催）

報告：フルトヴェングラー・センター　理事　宮嶋大貴

今回のレクチャー・コンサートは、新進気鋭の指揮者・坂入健司郎氏を講師にお迎えして開催されました。坂入氏は本年 1 月 24 日、すみだトリフォニーホールにおける「ザ・シンフォニカ」の定期演奏会にて、当センター提供のフルトヴェングラー版シューマン：交響曲第 4 番の楽譜を使用して指揮されており、その貴重な実践経験と研究の成果についてお話しいただきました。

冒頭、演奏会の映像を視聴した後、改めてプログラムに本曲を選んだ経緯について、メインに据えられた R・シュトラウスの「アルプス交響曲」に対し、前半にその大編成を生かせる作品を模索するなかで、本曲の着想に至り、強い確信と意欲を持って推薦されたとのことでした。レクチャー本編の終わりには、「アルプス交響曲」との親和性も高く、今後もぜひ機会があれば取り上げていきたいと力強く語られていました。

レクチャー本編では、編曲版として著名なマーラー版との比較を交えながら、フルトヴェングラーによる改訂の内容を詳細に解説してくださいました。特に特徴的だった点として、
・**木管の倍管**：マーラー版にはない改訂。木管セクションを厚く補強。
・**ティンパニの様々な改訂**：マーラー版と共通する変更と異なる変更の混在などが挙げられます。一般的には「原典尊重」のイメージが強いフルトヴェングラーですが、この作品においては積極的に手を加えていたことが分かりました。一方で、当時としては一般的だったと思われる改訂を採用している点もあり、マーラー版との比較を通して、当時の指揮者に共通する特徴と、それぞれの指揮者の個性が見えてくることが分かり、非常に興味深い内容でした。

さらに指摘されたのが、今回使用された総譜には通常の校訂報告（クリティカル・レポート）が付属しておらず、各書き込みが「いつ記されたものか」判然としない状態だったことです。坂入氏は「まるで歴史書を読み解くような作業だった」と振り返り、例えば冒頭に記された謎の「D」という文字も、録音や資料を精査する中で、ようやく「Doppel（倍管）」を指しているのではないかと突き止めるなど、記した本人でなければ意図を読み取ることが難しい、暗号のような記載を読み解く苦労についてもお話しされました。今回、幸いだったのは、各パート譜について、各楽器奏者が真摯に楽譜に向き合い、奏者からの指摘などもあったことで、さらに細かい点に向き合い、理解を深めることができたとのことでした。

今回、DG の録音記録（Aufnahmeprotokoll）のコピーも配られ、当時の練習時間や、オーケストラに 104 名もの大編成が参加していたという貴重な事実なども共有されました。木管が倍管であることを含めても、これはかなりの大編成だったことが伺えました。

最後に、今回鑑賞したフルトヴェングラーの 2 つの録音（DG スタジオ録音とルツェルン音楽祭でのライヴ録音）の比較にも言及されました。ルツェルン音楽祭でのライヴ録音に見られる凄まじい熱気やテンポの変化に対し、ベルリンでのスタジオ録音では行われていない変更もあることから、フルトヴェングラーがオーケストラやホールの響き、奏者の特徴に応じて臨機応変に工夫を凝らしていた実像が伺えます。昨今の強い原典主義によってこうしたアプローチが一概に否定されるべきではない、という坂入氏の指揮者ならではの指摘には、強い説得力がありました。

シューマンの交響曲第 4 番は、フルトヴェングラーの指示が入った総譜、スタジオ録音、ライヴ録音と、研究に適した多くの資料が残されている数少ない曲であり、その状況を生かして、若手指揮者として活躍する坂入氏が、過去の巨匠が残した遺産を真摯に受け止め、理解を深めつつ、かつそれを自らの糧として新たな息吹を吹き込む、その探究姿勢に深く感銘を受けました。非常に充実した内容のお話だっただけでなく、今後のさらなるご活躍がますます楽しみになる素晴らしい時間でした。

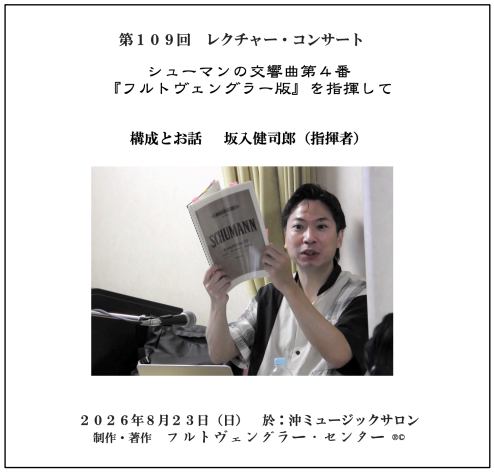
（宮嶋大貴）

頒布資料

恒例により上記のレクチャー・コンサートをビデオ収録致しました。遠隔地やお仕事その他で参加いただけない方々のために、当日の配布資料とともに、ブルーレイ・ビデオディスクで頒布いたしますのでご利用ください。



WFER2603-BD　¥3,200



WFER2604-BD　¥3,200

引き続きメニュー画面を用意して扱いやすくするとともに、講師のお話は音響用マイクロフォンで録音し、鑑賞用再生音源とともに DSD およびハイレゾ wav で別途収録し、聴きやすさと高音質を追求しています。鑑賞に使用した音源を、96kHz/24 ビット PCM 無圧縮ハイレゾ音源

として収録しました。さらに当日配布、映写した資料、楽譜などを適宜画面にはめ込み編集して、資料としても大変充実した内容になっています。

申込方法：

1. 同封の郵便振込票をご利用下さい。
2. 一応の申し込み期限は **2026 年 10 月 30 日（金）**です。
3. 原則として締切り時のご注文数を元に製作いたします。それ以降もお申込は戴けますが、追加製作・頒布まで日時を要する場合がありますので、できるだけ期限までにお申し込みをお願い致します。
4. このディスクはセンター会員自身が所有される事を条件に 3 セットまでご購入いただけます。オークションを含む転売及び譲渡目的・名義貸しは一切お断り致します。
5. **発送：　　2026 年 10 月以降**

お問い合わせの際は　①振込年月日、　②振込金額をお知らせ下さい

＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃

センター既発盤についてのご感想

WFHC-076/79 Furtwängler conducts Brahms's Double Concerto in 1949 & 1952

Dietrich von Kaltenborn　（バイエルン州立歌劇場管弦楽団チェロ奏者）

Dear Masayuki,

it was a really big pleasure to receive the new set. Two world premieres at one time!

Besides the usual considerations about sound quality, my goal was also to dig into the question of the precise date for the performance which was believed to be from Lucerne and now is considered to come from Vienna.

First of all, I have to say that I fully agree with the impression that this a recording with the same players as the January 27th performance.

It is more closely miked, which is not very flattering for the soloists and it shows a few little signs of tension, typical of a first night. For instance, the last movement is taken considerably slower, the Cellist comes in too early in bar 52 of the second movement, a missed note here and there - all this makes me assume, with all due caution, that this was the first performance on January 26th.

The second performance has the advantage of a better microphone placement and an overall more unified approach.

Coming to the Lucerne concert one has to acknowledge the fact that the recorded sound poses problems to the listener. Especially so in the quieter passages of the Brahms concerto, which is a pity because otherwise I would almost rate this higher as a performance then Vienna. Schneiderhan and Mainardi clearly are on a different level and it is apparent that they played together frequently in a piano trio.

Till Eulenspiegel is a powerful performance, the earliest post war version that we have, and benefits especially from excellent woodwinds in the orchestra. The Tchaikovsky was known to many probably already, a mighty concert and important addition to the Vienna studio recording.

This is surely a highlight and a very important release, beautifully presented with facsimile programs and adding two world premiere releases to the existing legacy.

Many thanks for this release and compliments to all involved!

Dietrich von Kaltenborn

新しいセットを受け取り、大変うれしく思いました。一度に二つもの世界初出とは！

通常の音質に関する考察に加えて、私がもう一つ取り組んだのは、従来はルツェルンでの演奏と考えられ、現在ではウィーンでの演奏と見なされているこの演奏の正確な演奏日を掘り下げることでした。

最初に申し上げたいのは、これが 1 月 27 日の演奏と同じメンバーによる録音であるという見方に、私は全面的に賛成だということです。

この録音ではマイクがより近くに設置されており、その結果、独奏者たちの音があまり好ましく収録されていません。また、初日の演奏らしいわずかな緊張感もうかがわれます。たとえば終楽章はかなり遅いテンポで演奏され、第 2 楽章第 52 小節ではチェロの入りが早くなっています。また、ところどころに音の外しもあります――こうしたすべてのことから、もちろん十分慎重な留保を付したうえで、ですが、これは 1 月 26 日の初日の演奏ではないかと私は推測しています。

1 月 27 日の演奏は、マイクがより適切に配置され、全体としてより統一されたアプローチがとられていることに利点があります。

ルツェルンでの演奏会については、その録音の音質には聴き手にとって少なからぬ問題があることを認めなければなりません。とりわけブラームスの協奏曲の静かな箇所ではそのことが顕著です。それだけに残念なことですが、それさえなければ、私はこの演奏をウィーンでのもの以上に高く評価したかもしれません。シュナイダーハンとマイナルディは明らかに一段高い水準にあり、両者がピアノ三重奏でたびたび共演していたことが演奏からも明らかにうかがわれます。

《ティル・オイレンシュピーゲル》は力強い演奏であり、現存する戦後最初の録音であることに加え、とりわけオーケストラの優れた木管群の演奏によって大きく支えられています。チャイコフスキーは、おそらくすでに多くの人々によく知られている演奏ですが、壮大な演奏であり、ウィーンでのスタジオ録音に並ぶ重要な記録です。

これは間違いなく特筆すべき成果の一つであり、プログラムのファクシミリを添えた美しい装丁でまとめられ、既存の録音遺産に二つの世界初出を加える、きわめて重要なリリースです。

このリリースを本当にありがとうございました。そして、この制作に携わられた皆様に、心から敬意を表します。

ディートリヒ・フォン・カルテンボルン

日本語訳：フルトヴェングラー・センター中村政行

WFER2602-BD（第 107 回レクチャー・コンサート記録ビデオ）について

会員・福原文彦

フルトヴェングラー・センター御中
毎回、貴重な録音、情報を提供いただき、ありがとうございます。
昨日、改良版ＢＤ、確かに受領いたしました。
ウラニアのエロイカを真正の姿で、しかも最良の音質で鑑賞でき、感謝感激です。
また、資料のピアノ版スコアは２段にまとめてあるため、私のような素人にもわかりやすく、大変重宝しております。実は来年のベートーヴェンイヤーに向け、少し真面目に勉強しようとポケットスコアを準備し始めていたのですが、ほぼ無用となりました。
今後の広瀬先生のレクチャーを楽しみにしております。

（匿名希望）

第 107 回レクチャー・コンサート　ブルーレイの修正盤が届きました。いつも有難うございます。早速、拝聴しました。
問題の部分は修正されて、第１、第２楽章と続けて試聴できました。
自宅で落ち着いてウラニア盤を聴きながら、いろいろ思いを巡らせました。

まず、レコードのパチパチノイズが非常に少ない事に驚きました。清水公典様提供の盤は確かに良い盤と思いました。市販の板起こし CD で聴くときは、多くは意図してノイズカットされているものと思っていましたが、そもそもオリジナルのノイズレベルが低かったことを再認識させられました。これが大戦中のマグネトフォン録音の中でも相当に高水準の録音で残された事は、幸運だったと思わなくてはいけないのでしょう。（他の RRG の録音もこの水準であったならと、つい思ってしまいます。）

昭和のフルトヴェングラー・ファンの多くは、この録音にいろいろ思い出があることと思います。当方は、1970 年にコロムビアの DXM-101 が出た頃に、ラジオをエア・チェックして繰り返し聴きました。（芥川也寸志氏と野際陽子氏の「100 万人の音楽」だったと思います。番組時間の関係で第 3 楽章は割愛。）センターの BD と比較して、ピッチ、狭いダイナミックレンジの問題もあり、当時私がエア・チェックして聴いていた再生音はかなりひどかったと思います。その頃の DXM-101 の短い新聞評（？）に「予期に反して、ディオニュソス的狂乱よりアポロ的厳しさを持つ演奏。」といった内容があったと記憶しています。当時のエア・チェックの再生音は「狂乱」、センターの BD は「厳しさ」（？）といったところでしょうか。

テープはどんどん再生困難になってゆくのに、LP・SP は頑張っているのは何だか不思議な気もします。次回も楽しみにしております。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

フランス・フルトヴェングラー協会の新譜（配信のみ）について



SWF D26
ヴィースバーデンでのフルトヴェングラー(1949 年 6 月 10 日収録)
プフッツナー：『パレストリーナ』から 3 つの前奏曲
モーツァルト：交響曲第４０番
ブラームス：交響曲第４番
ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
フランス協会制作の 192-24 及び 44-16 デジタル・ファイル
（フランス協会会員限定頒布）価格：15 ユーロ
（支払いは銀行振込又は Paypal）

第 110 回　レクチャー・コンサート開催

開催日時：２０２６年 11 月 15 日（日）
開演 午後１時００分開演　終了 午後６時ころ

（仮）「ベートーヴェンの交響曲第４番」
講師　広瀬大介博士

○参加費：
センター会員１０００円、（非会員２５００円）
○会　場：沖ミュージック・サロン　東京都文京区千石１－１７－６
℡　03-3943-5128
最寄駅：都営地下鉄三田線　千石下車、ＪＲ山手線　巣鴨下車

○お問い合わせ、予約：
電話または E メールで下記まで。会場設営の都合上、ご出席の場合は必ず予約をお願いいたします。ご予約の際は懇親会の出欠についても必ずお知らせください。キャンセルは前日までにお願いたします。
℡： 080-6603-3444
（電話でのお問い合わせなどは夜８時～１０時の間にお願いいたします）
E メール：info@furt-centre.com

終了後、講師を囲んで懇親会を会場で開催いたしますので、是非お気軽に参加ください。参加費は別途 2,000 円程度です。フルトヴェングラー・ファン同士で軽食とビール、ワインなどを食べ飲みながらの語らいはいかがでしょうか？

《お願い・お断り》

◎頒布資料の転売・譲渡等は禁止です！　名義貸し・転売・譲渡・オークション出品は厳にお断りいたします。
◎銀行振込の控は、お支払いの証拠資料です。紛失せぬよう大切に保管下さい！
　センターにお問い合わせをいただく時は、振込控に記載の「郵便局受付日付」と「金額」をお知らせ下さい。
◎海外協会の CD 等につきましては、あくまで取り次ぎサービスのみをさせていただいておりまして、フルトヴェングラー・センターとしては製品のソースそのもの、および妥当な外見性までの保証責任はもっていないことをあらかじめご了解いただきますようお願いいたします。また、視聴に支障がないようなケースその他の損傷、汚れなどによるお取替え、返品はご容赦下ください。
◎寄稿の内容はフルトヴェングラー・センターの主張・見解を代表するものではありません。
◎発行人の許可なく記事・写真等を無断転載・転用することは厳にお断りいたします。

ホームページに掲載した会報では、原稿がカラー写真の場合はモノクロではなくカラーでご覧いただけます。



ウィーン・フィルと共演

フルトヴェングラー・センター会報第 76 号　　発行日　2026 年 9 月
編集・発行人　フルトヴェングラー・センター®　　〒223-0052 横浜市港北区綱島東 2–14–16
名誉会長：アンドレアス・フルトヴェングラー博士
名誉会員：ズービン・メータ、クリスティアン・ティーレマン、パーヴォ・ヤルヴィ、ヘルゲ・グリューネヴァルト
アドヴァイザー：ヘニング・スミット（通称　オルセン）
理事・会長： 中村政行　理事：市川悠一、大橋陽一郎、津野宏、薬師寺純平、呼川秀邦、中村匠一(音響担当)、宮嶋大貴
監事：鹿内浩胤　チーフ・リサーチャー： 清水宏　　テクニカル・アドヴァイザー：清水公典

電話（お問い合わせなどは夜 8 時〜10 時の間にお願いします）080-6603-3444
ゆうちょ銀行振込口座　00240-9-111630
ゆうちょ銀行以外からの振込先：
（口座名義）フルトヴェングラー・センター
【店名】〇二九（読み　ゼロニキュウ）【店番】029　【預金種類】当座【口座番号】0111630
E-mail : info@furt-centre.com　　URL： http://www.furt-centre.com